論文を創る

守島基博
ＷｏｒｋｓＲｅｖｉｅｗ編集委員
一橋大学大学院商学研究科 教授

今年も Works Review の編集委員を務めさせていただいた。編集委員の主な仕事はいわゆる査読だ。実際のプロセスは、最終報告会での発表も題材として、今年提出された論文を読む、聞く。そして、修正が必要な部分についてコメントし、修正後、最終的に提出されたバージョンについて、その採否、また採用の場合は掲載形態を決定する。それがワークスレビューの「査読」だ。

ただ、通常の査読と大きく違うのは、書き手が誰であるのかも知っているし、また、時にはその相手が飲み友達だったりする。また、口頭発表があるので、こちらの疑問点を明らかにできるし、また批判への反論も聞くことができる。その意味で、通常の「査読」とは大きく異なる。

実はこのプロセスが何に似ているかというと、査読というよりは、論文指導に近いのではないかと思う。もちろん、私が通常大学院のゼミで相手にしている諸君よりは、もっとずっと経験も深く、能力の高い人たちなので、「指導」というのはおこがましいかもしれないが、このプロセスはやっぱり指導だと思う。今、米国などの専門誌でもいわゆる critical review（欠点を見つける査読）から、developmental review（良い点を育てていく査読）へ力点が移ってきており、Works Review のやり方は、最先端なのかもしれない。

ただ、developmental review になると、critical review と違い、落とすための査読ではないから、強調点がやや異なってくる。何が悪いかを探すのではなく、何を育てていけば良い論文になるのかを判断しなくてはならない。

したがって、「育てる価値」の有無をどう評価するかがポイントになる。この点、私に言わせれば大きく 3 点が大切である。まず第 1 に、あたり前だが、What's interesting?である。その論文で何が面白いのか。何が新しい洞察なのか。私はそうした点をまず探すようにしている。

別の言い方をすれば、何がそこにあるストーリーなのか。私はストーリーラインという言葉を使う。ストーリーが線のように見えてくる論文はそれだけで感動してしまう。逆に言えば、そうした面白いストーリーが伝わってこない論文は育てようがない。

今回ここに収録された論文でも、ストーリーがある論文とそうでない論文が混在していたように思う。正直にいうとそれが少し残念だ。勝手かもしれないが、Works Review は、多様なストーリーが読める、物語集のような存在であってほしい、と願うからである。

そして次の基準が、データや資料にどれだけ真摯かである。忙しい時間を使って、アンケートに答えてくれた人々や、インタビューに応じてくれた人たちに対して、その人の心の底をどこまで読もうとしているか、だと言ってもよい。

データや資料とは情報である。ただ、情報だからこそ、それが表面にあらわれてくるまでには多くの段階を経ている。その過程には資料やデータにならなかった多くの感情やプロセスがある。私はデータ分析という作業は、そうした見えにくい感情やプロセスを明らかにする作業だと思っている。単に回帰係数を計算し、因子負荷量をはじき出すのではなく、見えないメカニズムやプロセスを少しでも明らかにするための手段がデータ分析なのである。同じことがインタビュー資料の解釈にも言える。

その意味で、基準の問題とは少し離れるが、私は、研究上「土地勘」ということを大切にしている。テーマに関する自分の体験からくる知識、とでも言おうか。土地勘は完全ではない。だから、知識ではなく、勘なのだ。

でも、それをとっかかりにして現象の解釈を深めていける。そうした知識の原型みたいなものだ。むろん、これだけで論文は書けない。土地勘だけで地図が描けないのと同じだ。でも、これがないと、アンケートに回答してくれた人々やインタビューに応じてくれた人たちが体験していることと全く別方向の解釈をしてしまう可能性がある。ちなみに、自分の学生に対して、私はテーマが決まったら、まず土地勘を獲得するように伝える。

この意味では、今回のテーマ、人材のグローバル化はやや難しかったのかもしれない。でも、嬉しいことに、グローバル化という土地勘が乏しくなり易いテーマを、身近なテーマに読み替えて見事な作品に仕上げた研究も多かった。

そして、最後の基準が「作法」である。作法の重要性は Works Review が始まった時から強調されてきた。

一般的に作法とは、その学問分野で共有されている考え方や研究の手続きのことである。データ分析や資料の解釈、またこれまでの研究との関連付け、仮説設定への流れなど、分野によって少しずつ内容に違いはあるが、いずれにしても、そうした手続きに則っていることで、その論文における著者の主張は、トマス・クーンが言う意味で「正当性」が確保される。もちろん、あくまでもその分野の（これもクーンの意味で）パラダイムを共有した世界だけの正当性であることは頭の片隅に置いておく必要がある。でも、パラダイムを進化させ、強化するのが論文の主な機能だとすれば、この基準も譲れない。

正直にいって、Works Review 執筆陣のこの意味での進歩は目を見張るものがある。本当におめでとう。

巻頭の挨拶というのにはやや難解な文章になってしまった。また、私自身を振り返って、3 つの基準に合格する論文が書けているかといえば、お恥ずかしい次第であり、大言壮語気味である。

現実に戻って今年の Review を評価すると、3 つの基準、どれをとっても大きな成果が上がったと思う。皆さん、ご苦労さまでした。